

説教余滴、2018年6月24日、フランクルの言葉

この欄には、一般的なことを書くように努めてきました。また、誰がお読みくださるか判らないので、誰にも解ることを、わかりやすい文章にしようと考えてきました。

今回は、難しいかもしれません。私の側で、種切れになったのでしょうか。お読みくださる方々のレベルがわからなくなったのでしょうか。決して小難しいものではない、と思います。今回は、ヴィクトール・フランクルの言葉を取り上げてみました。彼はオーストリアの精神科医師、心理学者です。ヨーロッパの大戦中、ナチドイツの強制収容所に収容され、其処での経験を一書にまとめました。

『夜と霧・・・強制収容所におけるある心理学者の体験』みすず書房、

収容所を体験し、生還したフランクルは、ロゴセラピーを創始しました。

これは、自らの人生の意味を発見するプロセスを「援助する心理療法」と言われます。

「人間が生きることには、常に、どんな状況でも、意味がある。この存在することの無限の意味には、苦しむことや死ぬこともつまり、
苦と死さえも含まれているのだ。」

(収容所で他の囚人たちを鼓舞するためにフランクルが語った言葉)

収容所は、ヒトラーのユダヤ人問題を最終的に解決させる絶滅収容所でした。人間としての尊厳を奪い、文字通り「生ける屍」状態にし、「最終処理」を行いました。

戦後、フランクルが創始した心理療法は、自らの人生の意味を発見するプロセスを援助しよう、とするものです。

今の日本は、国民の半数近くが下流化しつつある、総下流化一歩手前の社会と言われます。

安定した生活であっても、この先には何も見えない。心の中に空虚を抱えている現代人は、

「生きる意味」を見出すことを求められます。